

ハイデガー「技術論」でアメリカ公共宗教を読み直す —書評・藤本龍児『「ポスト・アメリカニズム」の世紀』—

会田弘継

1. はじめに——本書の構造

『アメリカの公共宗教—多元社会における精神性』（2009年）で注目された著者による12年ぶりの新著である。前著では社会（哲）学・宗教学の観点から現代アメリカに深く切り込んでいった。宗教右派や新保守主義（ネオコンサーヴァティズム）、多文化主義（マルチカルチュラリズム）といった現代アメリカ政治を揺り動かしている問題をも、ときに建国期以来のコンテクストに置きながら、大きな構えで論じた。

博士論文を基にした本だったにもかかわらず、公刊当時、広くマスメディアに注目されたのは、アカデミックな枠を乗り越えて、生々しい時局の問題にも取り組んでいった著者の姿勢による¹。前著がそうした現実感を持った本となったのは、9・11テロの衝撃により生み出された知的産物だったからだろう。本書もまた、9・11テロの標的とされたアメリカ主導のグローバリズムの象徴ワールドトレードセンター（WTC）の廃墟から見つかった十字架状のH鋼の梁のエピソードから始まる。「WTCクロス」と呼ばれた。著者の論考が9・11の衝撃の影の下にありつづけ、アクチュアルなものであることを強く印象づける²。

前著執筆の目的について著者は、そのまえがきの最後で次のように述べていた。

……二十一世紀に入り、9・11テロや世界同時不況によって、現代文明のモデルとしてのアメリカはほころびが見え始めた現在、日本が〈ポスト・アメリカニズム〉の地平を切り拓き、近代という難問にたちむかうための一助になればと思う³

本書はそのタイトルから明らかなように、前著で意図したところを引き継いでいる。前著以降、さまざまな場で著者が発表してきた論考をベースにして、主に宗教社会学的な観点で、再び現代のアメリカを分析しているが、著者自身も「あとがき」で述べるとおり「文明論」の色合いが濃くなった。前著にはなかった切

り口が加わり、それを思い切って正面に打ち出しているからだ。その切り口とはすなわち、後期ハイデガー哲学の「技術論」を用いてアメリカニズムの意味を整理し直し、さらにそれを前著で著者が行ったアメリカの公共宗教の分析につないで、アメリカ社会の現在を理解していく試みである。

第一章「『現代文明』の形成と動揺」、第二章「アメリカニズムとキリスト教文明」がその試みに宛てられ、第五章「ネオリベラリズムと福音派」が第一、二章での議論を現代アメリカの事象へとつないでいる。それらの中間である第三、四章は、第一、二章と第五章をつなぐ伏線となっている。中間の2章では現代世界は俗に信じられているような「世俗化」の方向ではなく、むしろ逆に宗教が意味を増す方向に進んでいることについて、いくつかの解釈を提示している。

最後の第六、七章、エピローグではトランプ現象とポピュリズム、宗教右派の問題や、前著でも重要な論点として扱った多文化主義、さらに現下の世界的課題であるコロナ・パンデミックを宗教問題に絡めて議論するなど、時務論的展開となっている。

以上が本書の構造である。本稿では主として、著者のいう「文明論」の部分、つまり第一章から第五章までに焦点を当てて、論評してみたい。そこで本書のタイトルである「ポスト・アメリカニズム」あるいはアメリカニズムそのものの議論が集中的になされており、「宗教性」を媒介にしてハイデガーの「技術論」をアメリカニズムの動因としてのアメリカ独特の資本主義の有り様につないでいる。そこに著者の独創性の高い思索がうかがえる。

2. グラムシからハイデガー「技術論」へ

ここにいうアメリカニズムは、20世紀、さらに限定すればホブズボームのいう短い20世紀に世界史的にもまれな隆盛を見たアメリカが、その内に生みだし、広く世界に投射したシステムである。そのシステムの中で生まれた人間存在のかたちをも包含する。多くの国々がそのシステムに取り込まれたり、影響下に置かれたりしている。そのアメリカニズムは、おそらく1970年代以来、新たなフェーズに入っている。さらに21世紀に入って、9・11テロの衝撃に出合い、大きな振幅を見せ始めた。振り返れば「ポスト・アメリカニズム」の議論は1970年代から始まっていた。ベトナム戦争での敗戦、同時進行した金ドル交換停止によるブレトンウッズ体制の崩壊、アメリカ国内での人種対立激化……は、9・11以降の今世紀初頭の20年間に起きた様々な混乱に匹敵するくらい、あるいはそれ以上に深刻だったともいえる⁴。

そうした 1970 年代の危機にもかかわらず、アメリカは再生し冷戦を乗り越えて 1990 年代の繁栄を見た。しかし、その再生の中に孕まれていた矛盾が 9・11 テロを契機に長期にわたるアフガニスタン・イラク戦争、2008 年金融危機に象徴的に現れた。これらがトランプ現象、サンダース現象という左右のポピュリズム運動を巻き起こし、再び「アメリカニズムの終焉」あるいは「ポスト・アメリカニズム」が議論されているのが、こんにちの状況である⁵。

20 世紀、特に冷戦終結を経て勢いを増し世界を覆っていったアメリカニズムとは、まず「大量生産・大量消費にもとづくリベラル・デモクラシー」であった。そのことの意味をもっとも早くにとらえたのはアントニオ・グラムシであり、その「獄中ノート」(1934 年)で研究課題の一項目として「アメリカニズムとフォードイズム」を挙げ、思索を書き付けた。アメリカ的なものすべてが野卑で軽薄と見下げられる傾向が強かった 19 世紀的視点が依然として残るなかで、グラムシはヘンリー・フォードが自動車製造で始めた「大量生産・大量消費」のシステム(フォードイズム)が欧州にまで広がる様子に、いち早く「近代文明の転換」を見て、その思索をまとめた。

本書著者は、グラムシはフォードイズムのうちに「不気味な力」を見たと言い、そのグラムシの分析にハイデガーが展開する「技術論」やアメリカ観の先駆ともいべき位置づけを与えている。グラムシのフォードイズムに関する思索は 1919 年にトリノのフィアット自動車工場にフォード式の労働・生産様式を見たことに始まっている。ハイデガーが技術やアメリカニズムに文明論的な思索を向け出すのは 1930 年代からとみられるから、グラムシが先行している⁶。

グラムシがアメリカニズムに「不気味な力」を見たと本書著者が指摘するのは、たとえばグラムシがアメリカニズムとフォードイズムを「計画経済組織にいたる内在的必然から生まれたもの」としたところなどであろう。グラムシは 1920 年代当時、フォードイズムとロシアで革命後に発展していく計画経済をひとつながりの流れとみていた。このグラムシの視点は、ハイデガーが 1935 年夏学期の講義で「ロシアとアメリカは、形而上学的に見れば、同じものである。枷をはずされた技術と平均的人間の根拠のない組織化が、同じように慰めもなく荒れ狂っている」と述べ、さらに 1942 年夏学期の講義で、ボルシェヴィズムも「アメリカニズムの一変種」とみた視点と通底する。本書著者は「ハイデガーは、グラムシ以上にアメリカニズムを哲学的にとらえていたが、そこに不気味な力を察知している点では共通していた」とみる⁷。

この「不気味な力を察知」という表現はむしろハイデガーの方により当てはまろうが、それは講義当時のハイデガーとドイツの政治的立場が影を落としていた

からだともいえそうだ。グラムシはより中立的にアメリカニズム＝フォーディズムを見ていたようにも思えるが、ボルシェヴィズムの実験が失敗に終わったことが明らかなこんにちから振り返ると、グラムシの文章にも不気味な響きがあるのは否定できない。

本書著者が「ポスト・アメリカ」論の起点として第2章で詳述する、このグラムシーハイデガーによるアメリカニズムとボルシェヴィズムの一体視は、たとえば哲学者ジョージ・サンタヤナの同時代（1920～50年代）の思想にもうかがえ、20世紀前半の欧米知識社会における世界観のひとつの典型だったかもしれない⁸。ハイデガーは、本書著者も引用するとおり35年夏講義で「ヨーロッパはロシアとアメリカとに挟まれて万力の中にある」と述べ、ヨーロッパはそこで自殺しようと身構えているという見方を示した。形而上学的視点から語っているのだが、大戦に向かう中でナチズムに傾斜するハイデガーが現実の世界情勢を見る視点を反映するような観察だ。他方で、その後の20世紀世界の構図を見通すようでもある。ハイデガーの中では、そのロシアとアメリカを比べるとアメリカが重視されていたことも留意しておきたい。ただ、この時代、こうした地政学的視座も、ハイデガーのみのもものではなかった⁹。しかし、こうした視座が戦後「技術論」というかたちで文明論的展開をしていくところにハイデガー思想の重要性、今日性を見だし、そこにアメリカの宗教性を結びつけて論じているのが、本書の意義だ。

ハイデガー哲学は前期（～1927年）には存在論、後期（1936～）には技術論が大きな位置を占めるが、中期においてその橋渡しをするかたちで上記のようなアメリカニズム＋技術論が初期的な展開をみせる。技術論の主要なテキストは『講演と論文』（1954年）に収められている。1949年のブレーメン講演から1955年までになされた数回の講演が重要だ¹⁰。

本書著者はこうしたテキストを読み込みながら、ハイデガーが論じていたのは「技術の本質」であったと説明する。つまり文化の産物としての技術ではなく、文化、政治、宗教などと同列にあるものでもなく、「それらを規定する文明の根本要因」としての技術が持つ本質である。従って、そうした「技術の本質」から生じる「危機」も根本的なものとなってくる。それは単に核兵器技術が地球の文明を終わらせるというような表層的なことではなく、そうした技術をも生み出す本質、一切を技術によって染め抜いていくような力が人類文明（あるいは人間の精神）に危機をもたらすということである。

ハイデガーは、そうした技術の本質を「ゲシュテル（Gestell）」という独自の用語で表現した。ゲシュテルは「追い立てるように挑発ないしは徴発して役立てること」を意味し、ハイデガーの技術文明論の文脈の中において「総かり立て体

制」という訳語が一般化しており、本書もその訳語を用いている。本書の中で著者はハイデガーの「総かり立て体制」について次のように説明する。

あらゆるものを「役に立つモノ」として仕立て、臨機応変に効率よく利用するために「固有な位置」を奪って機動性をたかめる。しかもヒトを強制的にではなく自発的に動く主体に仕立て、流動的な「作為構造」の中で循環させる¹¹。

ここには、グラムシが「フォーディズム」の中に見たものを超え、「フォーディズム」以降の世界の哲学的本質あるいは危機をハイデガーが見ていたことが示されている。既述のようにアメリカとロシア（当時のソ連）の同質性と双方の危機に気付いた思想家たちが幾人もいた。グラムシの場合は、フォーディズムの先にソ連型計画経済の完成を見ていた。ただ、ハイデガーはあきらかにアメリカにこそ「総かり立て体制」のもたらす現代的危機がより深刻に現れているとみていた。本書著者は「ヘルダーリンの讃歌『イースター』」（1942年夏講義）の言葉を引用して、ハイデガーが「総かり立て体制」を進めるアメリカ（ニズム）を「デイノン（法外なるもの・休らいなきもの）」「不気味なもの」「故郷ならぬもの」と規定していたことを例示している¹²。その「ヘルダーリンの讃歌『イースター』」で、ハイデガーは次のようにも述べている。

アメリカニズムは、無節制の本来的に危険なる形態である。なぜならそれは、民主的で中産階級的な考え方という形で、またそれとキリスト教精神が混ざって登場するからであり、そしてこのすべてが決定的な歴史喪失の雰囲気の中なかで起こっているからである。

本書著者によれば、ここに言う「キリスト教精神」について、ハイデガー自身は詳述していない。アメリカニズムが起きた「決定的な歴史喪失」の雰囲気とは、欧州の歴史伝統から離れて自らの政治理念をつくり出したこと、そこから20世紀に至って「数と量による思考」をデモーニッシュなまでに極端化させ「故郷」や「西歐的なものの原初」を破壊してきたことを指す。その背後には、「自らの力で世界や人間、歴史を創ることができるとするアメリカニズム」があり、そのアメリカニズムには「キリスト教の創造論」が作用している、という解釈を示す¹³。

つまり、アメリカで「総かり立て体制」が極端なかたちで実現し技術大国になっ

ているのは、アメリカにおけるキリスト教精神によるのだという。さらに著者は、アメリカニズム＝「大量生産・大量消費にもとづくリベラル・デモクラシー」の根底に、アメリカにおける独特のキリスト教の発展を見ようとし、グラムシからハイデガーへと深まったアメリカニズムの考察をさらに深化させようと試みている。多くの読者が気付くように、ここでハイデガーの「技術論」とマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が接続する。そこに、本稿冒頭に述べたような本書著者の独創性がある。それをたどるには、読者はまず第五章に進んだ方がよい。

3. 総駆り立て体制と創造説

第五章でははじめに、1970～80年代からアメリカで隆盛となり、冷戦終結以降は世界を覆うようになった「新自由主義（ネオリベラリズム）」が論じられる。著者が引用する経済学者によれば、新自由主義は多義的で、いまや経済学用語としては使われなくなってきた、という。しかし、著者は社会思想としての新自由主義は重要だとみて、その概念がどのように変遷してきたかをたどり、新自由主義の中にキリスト教的世界観である「終末論」が隠れていることを明らかにする。その際に援用されるのは、フランスの哲学者ジャック・デリダやアメリカの政治学者ウォルター・ラッセル・ミードだ。

ミードは著書『神と黄金』で20世紀後半の新自由主義に至るひとつの源流であるウィッグ史観を「アブラハムの物語（ナラティブ）と資本主義の物語（ストーリー）」を力強く包括的に総合したものと論じた¹⁴。デリダは、冷戦の終わりをリベラル・デモクラシーと市場経済の勝利と定義して新自由主義の世界的拡大を支える理念となったフランシス・フクヤマの『歴史の終わり』に「福音」ということばが散りばめられていることに気付き、同書の主張は「形而上学的でキリスト教的な『終末論』である」と指摘しているという¹⁵。

裏に隠れたキリスト教的世界観という見方とはやや位相を変えるが、新自由主義は基本的に合理主義の否定を内包していることに留意しておいてもいいかもしれない。新自由主義には本書も検討しているようにいくつかの潮流があるが、そのうちでも最も重要な流れをつくったフリードリッヒ・A・ハイエクの思想は、まさに計画経済の合理性に対し市場の非合理性を対峙させ、合理主義の奢りを戒めるものだった。ハイエク思想の核をなすのは「法の支配」であり、「法の支配」の概念は宗教と切り離せない¹⁶。また、今日にまでいたるアメリカでの新自由主義的政策は、レーガン大統領に先立つカーター大統領時代（1977～1981年）に始

まったが、カーターは「ボーン・アゲイン」を公言した初めての大統領といわれる。

カーター、レーガン両大統領の時代を通じ、アメリカでは新自由主義と並行して福音派が興隆したことは両者の親和性を示すのではないか。著者はウェーバーの『プロ倫』を手掛かりに、そこへ論考を進める。ここで著者が注目するのは「脱魔術化」である。近代化の過程では科学的思考によって脱魔術化が図られると一般に考えられているが、ウェーバーはそれに加え「宗教」が果たした役割に光を当てた。他の主要宗教に比べ特に、プロテスタンティズムの場合、宗教倫理による脱魔術化が働く仕組みがあったとウェーバーは見た。

プロテスタンティズムの「天職 (Beruf)」の概念と、救済の「予定説」が世俗的生活における積極的な態度と生活様式の合理化を促す一方で、世俗外すなわち神やあの世との緊張関係を生み、近代の合理化を発展させるエトスをもたらした、とウェーバーは考えた。この脱魔術化の過程の始まりは、古代ユダヤの偶像崇拜や呪術排斥にあり、一切の宗教的儀式を排する真のピューリタンの信仰の形で完成した。

さらにウェーバーに従えば、救済を目指し呪術的世界を打ち破り合理化を追求するプロテスタントの行為は倫理的・宗教的価値で意義づけられた「価値合理的」なものだった。だが、やがて「救済」という価値が見失われ、人間の社会的行為はウェーバーが「形式合理的」と呼ぶ制度に組み込まれていく。現代文明の「鉄の檻」である巨大な官僚制による資本主義的経済組織である¹⁷。

本書著者は第五章で以上のように『プロ倫』を読み直す。ウェーバーの描く現代文明の姿は、本稿 2 節の冒頭で述べた 1970 年代に大きな危機を経てフェーズを変える前のアメリカニズムを考えるうえでは極めて有効だ。つまり巨大なテクノクラート集団を抱え巨大工場を動かして大量生産・大量消費に応じていくような製造業中心のアメリカを考えるうえでは、ウェーバー理論で納得できる。

だが、その後の新自由主義が隆盛となっていく時代に情報技術 (IT)・金融、あるいは GAF A に代表されるプラットフォーム企業が経済の中心となってきた。そうした時代におけるアメリカニズムを考えるにあたり、著者は「技術論」を主題とした後期ハイデガーの主著とされる『哲学への寄与』に依拠しながら、ウェーバーの文明論を修正していく。

ハイデガーはウェーバーとは逆に現代を「魔術化」の時代だととらえ、「この魔術化はどこから来るかを知らなければならない」と問い掛け、「答えは、作為性 (あるいは作為構造) のとどまることのない支配からくる」と述べている (『哲学への寄与』 59 「全き問いのなさ と 魔術化の時代」)。

『哲学への寄与』は筋道を追うのがまったく困難な書だが、本書著者は同書の 59 節を軸に、ハイデガーの「技術論」によるアメリカニズム解釈を進めている。「作為性のとどまることのない支配」とは技術による支配を意味していると解釈できる。同じ 59 節で、ハイデガーは現代に起きているのは「技術という魔法をかけること」とも述べている。

著者はハイデガーとウェーバーはまったく逆のことを言っているのではなく、2 人には共通性があると見る。ハイデガーは、あらゆる事象を数値化して算定することも魔術化として批判的に見ていたが、ウェーバーもすべての事象を算定することで支配できると考えるのは脱魔術化ではあるが「信仰」だとも述べている（『職業としての学問』）。こうして著者は、ウェーバーが「形式合理性」と呼んだものとハイデガーが「作為性」と呼ぶものに近似性を見る。

さらに著者は『哲学への寄与』を読み込むことで、「作為性（作為構造）」とは、あらゆる存在を数値化してとらえ、利用可能なものとして動員していくことであり、それこそが「総かり立て体制」にほかならないと理解する。

こうして数値化と算定を用いて、技術により不確実性を縮減していこうとするのが、こんにちの I T ・金融産業の世界であり、人口知能（A I）により人知を超えていける（シンギュラリティ）とする発想こそが、ハイデガーが指摘した「現代の魔術化」であると著者は結論づけている。ここで著者が注目するのは『哲学への寄与』67 節にある「作為性（作為構造）」と宗教に関する叙述である。ハイデガーが、作為性には「有るものを創造サレタモノ *ens creatum* とするキリスト教的一聖書的な解釈が含まれている」と述べている点である。このハイデガーの叙述に従えば、こんにち現前で展開する I T ・金融世界あるいはシンギュラリティを目指す A I 技術世界の「総かり立て体制」は、ユダヤキリスト教の創造説と親和性があるということになる¹⁸。

4. おわりに

以上が、本書著者がアメリカニズムに関して加えた新たな考察の中心部分である。本稿の冒頭で述べたように、1970 年代にアメリカニズムは大きな屈折点を迎えた。アメリカ資本主義は産業革命以来はじめて、先陣を切ってポスト製造業＝ポスト・フォーディズムの世界に突入した。他方、アメリカではキリスト教の信仰復興運動が定期的起きてきたが、1970 年代以降アメリカは新たな信仰復興運動の波のなかにあると考えられている。現在の信仰復興は、フォーディズム登場に先立ち 19 世紀末に起きた信仰復興以来の波である。そこで金融資本主義や I

T産業が大発展している背景は何なのか、本書はその理解を助けるものであろう。紙幅の都合で本稿では詳述できなかったが、ハイデガーとウェーバーを軸に本書が論じる現代世界の「魔術化」については、ユルゲン・ハーバーマスの「ポスト世俗化」論やホセ・カサノヴァの「公共宗教」論によっても補完されている。本書は上述したようなアメリカニズムの現状への考察を軸にして、トランプ現象や多文化主義（マルチカルチュラリズム）などアクチュアルな事象にも切り込んでいる。では、著者が既に兆しがみえると言う「ポスト・アメリカニズム」は、いかなる形で訪れることになるのか。そこにおける「技術」と「宗教」はどんな意味を持つことになるのか。今後の著者の思索の発展に注目していきたい。

注

- 1 藤本龍児（2009）『アメリカの公共宗教—多元社会における精神性』（N T T出版）は2010年2月28日付「毎日新聞」朝刊読書欄書評（評者・松原隆一郎）、同年2月6日付「読売新聞」夕刊「次世代人」欄での著者紹介など主要新聞で取り上げられた。なお、当時は次作として著者による「日本の公共宗教」執筆が期待された。
- 2 藤本龍児（2021）『「ポスト・アメリカニズム」の世紀』（筑摩選書）pp. 14-16 参照。
- 3 *Ibid.*, p. 9.
- 4 1972年4月、当時のニクソン大統領は思想家ラッセル・カークを招いて「（この国に）希望はあるか」と尋ねて議論した。カークはビザンチン帝国を例に挙げ大国の消長を論じた。当時の政治指導者の危機感を象徴するエピソードである。Russell Kirk, *The Sword of Imagination* (Grand Rapids: Eerdmans, 1995) pp. 330-335
- 5 1970年代のアメリカのフェーズ転換は本書（藤本2021）も指摘し（p. 30）、古矢旬（2021）『グローバル時代のアメリカ』（岩波新書）も第一章で論ずるところだ。拙著・会田弘継（2017）『破綻するアメリカ』（岩波現代全書）第1章でもさまざまな経済指標や社会指標を用いて説明した。藤本2021が扱うのはアメリカ衰退論よりスケールの大きな「文明論」だが、会田2017序章では、20世紀後半から今世紀にかけての衰退論の系譜も通観しているので参照されたい。
- 6 グラムシのフォーディズム論から20世紀アメリカニズム、あるいはポスト・アメリカニズムを論ずる視点は、佐伯啓思（1993）『「アメリカニズム」の終焉』（TBSブリタニカ）、古矢旬（2002）『アメリカニズム』（東京大学出版会）も参照されたい。両氏の諸論考はともに本書著者に影響を与えてきた。なお、両氏が本書著者の司会で行った対談『「アメリカ」とは何か？』『ひらく』5（エイアンドエフ、2021年）も本書と相前後して公開された。
- 7 グラムシの引用は山崎功監修（1965）『グラムシ選集3』（合同出版）p. 15。ハイデガー引用は本書pp. 64-65のほか、岩田靖夫ほか訳（2000）『ハイデガー全集第40巻 形而上学入門』（創文社）も参照した。なお、1935年講義は『形而上学入門』として刊行され、42年講義は「ヘルダーリンの讃歌『イースター』」と題されている。
- 8 ジョージ・サンタヤナ（1863～1952）は1920年代以降、世界文明は「産業自由主義」によって「たった一種の安っぽくてつまらない型に格下げ」されていくと見た。それを「共産主義」と呼ぼうが「アメリカ式生活」と呼ぼうが、「無限に抑圧的で単調な未来

の支配体制」が差し迫っていると考えた。Russell Kirk, *The Conservative Mind* (Regnery Books: 1953)の第12章参照。

- 9 たとえば、トロツキーと親交を持ちながら独ソ不可侵条約締結で共産主義を捨て、新しい世界観を形成して戦後アメリカ思想界に大きな影響を及ぼしたジェームズ・バーナム (1905～1987) は、アメリカも共産ロシアもテクノクラート支配という点で変わらないとみた。世界はアメリカ・西欧、ロシア、東アジアを核に3つの抑圧的なテクノクラート支配圏に分かれて争うというバーナムの未来世界像は、冷戦戦略だけでなく、戦後アメリカに現れた各種のエリート支配論に影響を与え、トランプ現象の底流ともなっている。ハイデガーの「技術論」とも通底するところがある。会田 (2018) 「ジェームズ・バーナム思想とトランプ現象」アメリカ学会『アメリカ研究』52, pp. 41-63 参照。なお、こうしたアメリカとロシアについての洞察のごく初期のものは、「アメリカニズム」の重要エレメントであるデモクラシーを考察したトクヴィルにみられることに留意したい。松本礼二訳トクヴィル『アメリカのデモクラシー』第一巻 (下) pp. 48-49 参照。
- 10 このうち3講演は簡便なかたちで日本語でも読める。マルティン・ハイデガー『技術とは何だろうか』森一郎編訳 (講談社学術文庫) が「物」「建てること、住むこと、考えること」「技術とは何だろうか」の3講演を収めている。Ge-stell などハイデガー独特の言葉使いで、極めて重要なものについて本書著者は、森一郎の訳語を用いている。
- 11 藤本 2021, p. 81
- 12 現代欧州思想における反アメリカニズムの系譜をたどったジェームズ・W・シーザーも著書で、アメリカとロシア (ソ連) の国家体制の「形而上学的な」類似性を述べていたハイデガーは1942年 (「ヘルダーリンの讚美『イースター』」となる講義が行われた年) ごろからアメリカニズムこそ近代性の危機の唯一のシンボルとみるようになり、戦後は技術主義を最大限に体現したアメリカこそが強く危機感を持っていたと指摘している。James W. Ceaser, *Reconstructing America: The Symbol of America in Modern Thought* (Yale University: 1997) pp. 189-190、村田晃嗣ほか訳ジェームズ・シーザー『反米の系譜学』(ミネルヴァ書房) pp. 201-202。
- 13 藤本 2021, pp. 83-84。
- 14 Walter Russell Mead, *God and Gold* (Vintage Books: 2007) ウォルター・ラッセル・ミード (寺下滝郎訳) 『神と黄金』(青灯社) 下巻 p. 153。
- 15 藤本 2021, pp. 175-176。
- 16 F・A・ハイエクの合理主義・科学主義批判は、*Counter-Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason* (Free Press: 1952) 参照。「法の支配」の発展と宗教の関連についてはフランシス・フクヤマが Francis Fukuyama, *The Origins of Political Order* (Farrar, Straus and Giroux: 2011) で詳述している。
- 17 藤本 2021, pp. 193-202。
- 18 藤本 2021, pp. 202-217。なお、『哲学への寄与』からの引用については、藤本 2021 内からの再引用に加えて、邦訳『ハイデッガー全集第65巻 哲学への寄与論考』(創文社: 2005年) からも引用した。なお引用にあたっては、一部訳語は藤本 2021 が使用した訳語に変えた。